

保育所・幼稚園における支援を必要とする子どもの 情報共有と小学校への引き継ぎの在り方についての研究

教育学部特別支援教育講座 研究委託生 清都康雄

問題と目的

保幼小の連携が行われているものの、小学校において情報が適切に引き継ぎ、活用がされていないことや、現場が求める情報が得にくいという実態がある。情報を伝える側である保育所・幼稚園の保育者が持つ、小学校との連携および引き継ぐ情報に関する意識を明らかにし、保育所・幼稚園における情報共有の在り方と小学校との引き継ぎの在り方について検討を行った。

対象および方法

A市内保育所15園および幼稚園6園、B市内保育所11園および幼稚園21園に勤務する、管理職・養護教諭・加配職員等を含む593人を対象にアンケートを実施した。(回収数542人(91.3%)有効回答数462人(85.2%))。

調査期間は平成27年9月上旬から11月下旬。

調査内容は、子どもの姿について引き継ぐべき事項を尋ねた(小学校教諭が捉える子どもの望ましい行動や問題行動として挙げられた行動から構成された40の観測項目(小林, 2003)を採用)。

結果

保育所・幼稚園から小学校へと、子どもの姿について引き継ぐべき事項を尋ねた40項目について、担当別(0~2歳児・3歳児・4歳児・5歳児・担任外)に平均点を求め、Ward法によるクラスター分析を行った。Fig 1に示したデンドログラムにおいて、距離2でクラスターに分割したところ、4つのクラスターが得られた。クラスターそれぞれの平均評定得点は、クラスター1、クラスター4、クラスター3、クラスター2の順に高かった。

最も平均評定得点の高いクラスター1は、集団生活を送る上で何らかの困難を示すものから構成されていた。次に得点の高かったクラスター4はルールに関するものから構成されていた。クラスター3は生活面に関するものから構成されていた。クラスター2は個人の性質・性格に関するものから構成されていた。

次に、現在の担当別と障害のある子の保育担当(担任)経験を独立変数、それぞれのクラスターを従属変数として、2要因分散分析を行った。その結果、クラスター1においては、現在の担当($F(4,360)=7.463, p<.001$)に有意な主効果が認められた。現在の担当の主効果における多重比較をした結果、0~2歳児担当・3歳児担当・4歳児担当と5歳児担当間において0.1%水準で有意であった。クラスター2においては、現在の担当($F(4,210)=10.863, p<.001$)に有意な主効果が認められた。現在の担当の主効果における多重比較をした結果、0~2歳児担当・4歳児担当と5歳児担当・担任外間、3歳児担当と4歳児担当・5歳児担当間において5%水準で有意であった。クラスター3においては、現在の担当($F(4,240)=11.707, p<.001$)に有意な主効果が認められた。現在の担当の主効果における多重比較をした結果、0~2歳児担当と3歳児担当・5歳児担当・担任外間、4歳児担当と5歳児担当・担任外間において1%水準で有意であった。クラスター4においては、現在の担当($F(4,270)=9.328, p<.001$)に有意な主効果が認められた。現在の担当の主効果における多重比較をした結果、0~2歳児担当と4歳児担当・5歳児担当・担任外間、3歳児担当と5歳児担当間において5%水準で有意であった。

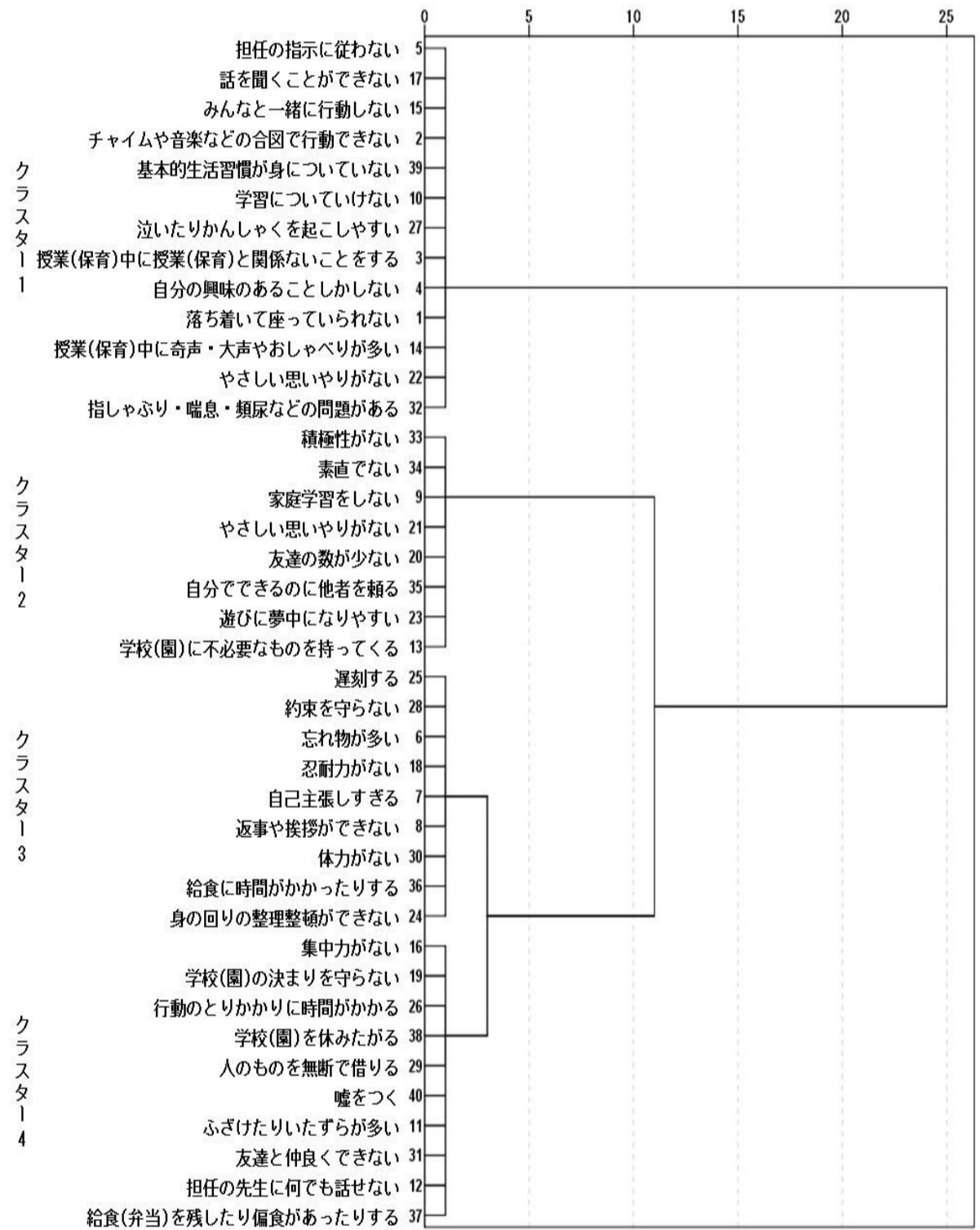


Fig 1 子どもの姿について引き継ぐべき事項に関するデンドログラム

考察

学年をまたいだ縦断的な情報共有

今回の調査から、保育者の担当するクラスによって子どもの姿に対する意識の違いが明らかとなった。このことは、保育者は子どもの定型発達に基づいて評価を行っていることを示唆している。幼少期であるほど発達が未分化であるため、特徴的な行動に気がつきにくくなり、保育者の子どもの姿に対する意識に影響を及ぼしている可能性がある。このことは、園内の情報共有の在り方において、担当する学年によって、保育者間相互の子どもに対する捉え方の差異を生じさせていると考えられる。担当間によって子どもの捉え方に違いがあるならば、園内における情報共有の在り方を見直す必要がある。そのためには、担当間の交流によって共通認識を図り、捉え方の違いに気付いたり、支援の手立てを共有したりすることが大切である。また、目立たない子どもたちを複数の保育者で見守り、気付きの視点が共有できる園内の支援体制の構築も重要である。

保育所・幼稚園・小学校間における双方向の情報伝達

小学校側が入学時に引き継いで欲しい内容として、発達障害に関係する情報の要求が高いことが先行研究で明らかとなっている。今回の調査では、集団生活を送る上で何らかの困難を示す項目、すなわち発達障害の特性に関わる項目の引き継ぎの優先度が高かったことから、伝えたい情報と伝えて欲しい情報は一致していると言えよう。にもかかわらず、情報の伝達が適切に行われていない要因として、情報が保育所・幼稚園から小学校へ一方通行となっていることや、目立つ子ども中心の引き継ぎが考えられる。伝えたい情報がどのように活かされ、子どもにどのような変容が見られたか、目立つ子どもの陰に隠れた子どもたちについてどのような見立てが必要か、小学校から保育所・幼稚園へ伝達することも大切である。その結果、互いのニーズの把握や共通理解につながり、充実した引き継ぎが行われることとなるであろう。